

苦境に立たされる文具店
万年筆に光明を見出す

川崎文具店は1923年、滋賀県柏原村（現米原市）で創業。近江商人だった初代川崎重松さんは文具をはじめ、炭や魚、野菜などさまざまな生活必需品を売り歩いた。彦根の文具店で修業した2代目光治さんが戦後、大垣に店を構えた。

かつて必ずといっていいほど学校の校門前にあった文具店は、減少の一途をたどっている。経済産業省発表の商業統計調査によると、文具店に該当する「紙・文房具小売業」の国内事業所数は、2016年時点で

7157店。平成初の調査となった1991年と比べると、72.4%減少している。コンビニエンスストアや100円均一、ホームセンター、通販など、競合ひしめく中で、「まちな文房具屋さん」は厳しい経営判断を迫られている。



昭和初期の写真。写っているのは、2代目光治さん

2009年、4代目であり父親の光一さんから後を継いだ川崎さんはこうした状況を踏まえ、思い切った決断を下した。それが、より細分化したニーズへの特化だった。「お客様から相談してもらえらるラ インアップにしないと、店員の存在意義はない。そう考えたとき、思いついたのが万年筆でした」

心行くまで書いて試せる
行き届いた気づかいの背景

新たな店づくりのコンセプトは、「文房清玩」。文房とは書斎、清玩とは見て楽しむという意味で、川崎さんは「ここは、お客様と共に文房具

を愛でる場」と笑みを見せる。

「私は店員ではなく書斎の主であり、文房具の作り手の思いを解説する学芸員でもあるんです」

万年筆は50種、インクはなんと500種以上を取り扱う。とくにインクの豊富さに驚かすにはいられないが、全世界で4000種を超えるといわれるインクの世界において、自らを「色彩の錬金術師」と称する川崎さんが実際に試し、納得したもののばかりだ。



上) 試し書きスペースにはインクがずらり。あまりの品ぞろえは、愛好者から「インクが床に浸水してる」と感心されたほど。下) 調べたインクを試し書きするとき、必ず書く言葉が「色即是空」。空になつて色と向き合う」という川崎さんの姿勢をあらわしている。店に立つ際はモックロの服装が身につけられないのも、同じ理由だ。クリスマスツリーを飾る今回の色は「クリスマスの夜、ケーキを食べるところ」という依頼で、調べてくれた

巻頭特集

大正12年創業の老舗、川崎文具店がいざなう

ようこそ、

魅惑の万年筆の世界へ

大垣駅南口から歩いて5分ほど。駅通りから一本入った路地に、川崎文具店はある。

店先にはノートやペンが並び、一見すると昔ながらの「まちな文房具屋さん」にしか見えない。

しかし奥へと足を運べば、印象は一転。陳列棚に色とりどりの

インク瓶が整然と並んでいる様は、まるで美術館のようだ。

ハンチング帽が印象的な店主の川崎紘嗣さんが出迎えてくれた。



要望に応じてインクの調合にも応じる。ベースとなる色を決めたら、電子秤を使って少しずつ混ぜ合わせイメージに近づけていく。色が徐々に変化していく様子を見るのも面白い

使い込むほど書き手の癖を覚え、滑らかな書き心地に進化する万年筆は、成長する文房具。

しすることが大切です。万年筆とインクの世界は本当に奥深いですから、納得いくまで試してもらいたい」

24人の武将が色で蘇る
「色彩語・古戦場関ヶ原」

万年筆やインクの魅力を知ってもらうため、川崎さん自ら商品開発にも精を出している。これまでに商品化したオリジナルインクの数は100種類ほど。中には地元でこだわった製品もあり、その最新作が9月に発売した「色彩語・古戦場関ヶ原」だ。

420年の節目を迎えた関ヶ原の戦いをPRしようと、関ヶ原町歴史民俗資料館の飯沼暢康館長監修のもと全24色を用意。徳川の時代となった後も豊臣家への忠誠心を貫いたといわれる福島正則は忠誠心を表す青関ヶ原の戦いに敗れた西軍の主力として戦いながら、84歳の天寿を全うした宇喜多秀家は幸運の緑など、武将たちのエピソードを色彩で表現した。各武将の陣跡などを訪れ、その場で調べているため、関ヶ原の空気感も味わうことができ、まさに関ヶ原の戦いを想起させる一品となっている。

月額5980円のサブスクリプションサービスで、毎月2種ずつ全12回にわたって関ヶ原が手元に届く。インクにはそれぞれの家紋が入った漆塗りの専用木箱が付くほか、刀掛けを模した万年筆置き、陣風スマートフォン立てといった特典など、細部までこだわり抜いた製品は関ヶ原ファンの心を捉え、北海道から沖



「色彩語・古戦場関ヶ原」第1弾の福島正則と宇喜多秀家。武将たちの組み合わせ方には意味があり、福島正則と宇喜多秀家は第1弾らしく、関ヶ原の戦いにおいて初戦を繰り広げた2人だ。川崎文具店と関ヶ原駅前観光交流館ではバラ売りもしている

見て楽しむのはもちろん、満足するまで試し書きができるのも川崎文具店のユニークなところ。店内の一角には、万年筆の書き心地やインクの発色を確かめるスペースを設置。使用シーンを想像しやすいよう、調光と調色が可能な電気スタンドに、紙も数種取りそろえているため、書斎の主になったかのような気分が椅子に座り、じっくりと選び抜ける。数時間にわたって滞在する客は多く、中には朝来店して夕方まで留まる客もいるという。

客目線であれば魅力的なサービスだが、店側にとってはインクの洗浄など、手間を要する。それでもこのサービスを続けているのは、修業時代自動車販売の営業で培った経験と、プロフェッショナルとしての誇り、そして文具への深い愛情があった。

「車と同様、万年筆もインクも高い買い物。1万円を超える筆記用具を購入するのは、清水の舞台から飛び降りるようなものでしょう。数ある競合と値引き以外で勝負するには、誰にも負けない商品知識を身につけること、お客様に最適な商品をお渡



川崎文具店 5代目
川崎紘嗣さん

縄まで、50組以上から申し込みがあった。

年明けにはオリジナル万年筆第2弾の販売も控え、川崎さんのアイデアは留まるどころを知らないようだ。万年筆やインクの一体何が、川崎さんの想像力を刺激し続けるのだろうか。「万年筆は使い込むほどペン先が書き手の癖を覚え、書き味が良くなっていく。自分だけの万年筆へ育てていく面白さがあります。また、その名の通り半永久的に使えるので、自分の生きた証を残すこともできる。わたしも、お客様から受け継いだものを使っています。こんな筆記用具、ほかにありません」

まもなくクリスマス。長く愛用できる万年筆は、「これからもよろしくね」という気持ちを伝えるにはぴったりな贈り物だろう。思いを色に込め、手書きのメッセージカードを贈るのもいいかもしれない。



川崎文具店
大垣市桐ヶ崎町64
☎0584(78)4223
営/9:00~19:00 休/不定休
www.kawasaki-bunguten.com/